

## 翻訳と近代

報告 山口裕之

国際日本研究センター比較日本文化部門主催・総合文化研究所共催による講演会「翻訳と近代」は、国際日本研究センターおよび総合文化研究所のそれぞれで展開している翻訳をめぐるプロジェクトの一環として開催されたものである。

全体を一貫するテーマは、近代化以降の日本の「翻訳」における欧米とのあいだの文化的力学である。翻訳という行為は、二つの文化間で働く力の場のなかにつねに置かれている。しかしまた、その日本がアジアの漢字文化圏のなかで、それぞれの近代化と言語形成に対して強い影響力を行使してきたという歴史がある。日本で展開した翻訳のあり方、そしてまた近代日本語の形成は、そのような歴史的な関係性を度外視して考えることはできない。

こういつた視点のもとで、この講演会では中川成美氏（立命館大学教授、日本近現代文学）と山口裕之（東京外国語大学、ドイツ文学・表象文化論・翻訳論）によって、二つの報告が行われた。

中川成美氏は、「あらゆる言葉を喰らい尽くせ——日本語翻訳と近代」というタイトルのもとに、文学という側面から日本語における近代化と翻訳の特質に光を当てた。中川氏は、『日本語が滅びるとき』のなかで水村早苗があげている普遍語・現地語・国語という言語の三つのあり方を引き合いに出しながら、

近代日本語が、「翻訳」という装置を用いることによって、早い時期から速いテンポで「国語」を形成してきたことであらためて注意を喚起する。日本は、欧米列強による強力な政治的圧迫のもとにありながらも、植民地のように宗主国の言語で語るというプロセスを経ることなく、自国の言語を作り上げてきた。そのために、近代化に際して「日本」という中間項を介在させることを余儀なくされた朝鮮の知識人においても、日本文化圏を讃美するような日本理解（誤解）が生じることさえあった。

このような急速で強力な近代日本語形成の過程は、例えば、西周の『百学連関』のなかでとりあげられているヨーロッパの言語と日本語による訳語との対照のうちにも、力強く現れ出ている。いわゆる言文一致が始まる明治二十年までのあいだに、なぜこれほどまでに日本語形成が劇的に進展してきたのか——そのプロセスの一端を、西周の例は如実に描き出している。中川氏はさらに、山田美妙や尾崎紅葉のテクストのうちに、言文一致以降の日本語形成の歩みを辿っていった。

山口裕之の発表「近代化のなかの非対称性——鏡像としてのドイツ？」は、日本の近代化において決定的な役割を果たしてきた翻訳が、欧米との関係性のなかで著しい非対称性を示して



いたことをあらためて浮かび上がらせた。

日本と欧米という関係を考える際に、多くの場合、「欧米」はあたかも一枚岩であるかのように、先進的な文明を体現する概念として用いられる。しかし、当然のことながら、「欧米」そのものがその内部に文化的に非対称な構造を内包する。とりわけ「明治十四年の政変」以降、ドイツ語およびドイツ文化は日本の言語と文化の形成にとって決定的な影響力をもち、大正時代以降の教養主義の形成において中核的な位置を占めることになる。だが、その「ドイツ」がヨーロッパ内部において、文化的・社会的後進国であるという意識をもち続けてきた（例えばそれがナショナリズム形成の過程で裏返しの優越意識に転換したとしても）。そういった歴史的経緯を考えるならば、先進的文化を体現するドイツ語テクストを日本人が翻訳するという行為のうちには、二重の非対称性が存在することになる。

とはいえ、この問題は単に日本とドイツ、ドイツとヨーロッパ（フランス）という静止的な二重構造によってとらえるべきものではない。姜尚中は、とりわけ橋川文三と丸山眞男に依拠しつつ、日本のナショナリズム形成の重要な特質として、「美学」への沈潜、あるいは「政治の美学化」の傾向をあげている。それは、教養主義のうちに形成されていった「内面化」「精神性」の価値、「文化」の優位性がとることになったかたちである。これらはドイツの教養市民層の価値観が、日本にとっての模範的文化として内在化されていったものであるが、それはまたドイツにおいては、まさに後進的な意識のなかで展開したナショナリズムとともに形成されてきたものでもあった。そしてまた、その同じ文化的模範像が、日本の統治下に置かれた国々

の知識人を通じて、さらに彼らの出身国の近代化の方向性に影響を与えてゆく。「翻訳」をそのようなダイナミックな力学のなかでとらえる視点がここでは示されることになった。

#### 講演会「翻訳と近代」

日時：二〇一九年三月一日（金）

場所：東京外国語大学アゴラグローバルプロジェクト

スペース

主催：国際日本研究センター 比較日本文化部門

共催：総合文化研究所

講演者：

中川成美（立命館大学）

山口裕之（東京外国語大学）

司会：コメンテーター..

友常勉（東京外国語大学）